

青梅市文化財ニュース

第432号

令和5年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

宿谷家日記

小曾木4丁目の民家の蔵から明治6(1873)年から大正2(1913)年まで約40年間にわたって書かれた日記が発見されました。著者である宿谷八郎兵衛(1844年～1913年)は、農業や質屋を営みながら、代々この地域の村役を務めた家の当主でした。明治6(1873)年は八郎兵衛29歳。大正2(1913)年69歳で亡くなるまで毎日欠かさず記してあります(亡くなる数か月前からは一部の記述は息子の佐太郎によるもの)。小曾木4丁目は、古くは「古^{こむしにわば}武士庭場」と呼ばれていました。庭場とは、村の中の数ヶ所に数軒から二十数軒程度を一つの単位として組織されていた生活共同体のことで、近世期には西多摩地域に多く形成され、南小曾木村には下記のような庭場が存在しました

「小^{こぶいち}布市庭場」…現在の小曾木1丁目

「厚^{あつざわ}沢庭場」…現在の小曾木2丁目

「荒^{あらた}田庭場」…現在の小曾木3丁目

「古^{こむし}武士庭場」…現在の小曾木4丁目

「中^{なか}井庭場」…現在の小曾木4丁目

「岩^{いわくら}蔵庭場」…現在の小曾木5丁目



これらの庭場名は、令和になった現在も日常的に地名として使われています。

既に同じ南小曾木村の小布市庭場からは幕末の安政6(1859)年から明治30(1897)年におよぶ38年間の日記「市川家日記」が発見されています。この著者は市川庄右衛門で、庭場内の出来事や生活の様子が農家の目線で記述されており当時の様子を知る貴重な資料となっています。

それに対し、「宿谷家日記」は村の代表となる村役としての立場からの記述が多く、役場とのやりとりや広範囲に渡る近隣の村々との関わりについても書かれています。宿谷八郎兵衛は質屋も営んでいたため金銭的なやりとりも克明に記してあります。日記の主な内容としては下記のものがあります。①天気 ②来客・外出などの交際の記録 ③庭場での寄合の記録と簡単な議事録 ④庭場内や近隣の村での行事や事件についての記録 ⑤農作業の記録 ⑥お寺(高德寺に関するものが多いが、近隣の寺についても記録あり) ⑦質屋としての記録(貸出・返済) ⑧学校設立のための寄付金積み立て記録

「宿谷家日記」と「市川家日記」は書かれた期間が重なっていることもあり、一つの事柄をそれぞれの立場から記述している箇所が多く非常に興味深く読むことができます。

(1) 明治六年、成木の久道村の火事についての記述

「市川家日記」

明治六年二月十五日

上成木村に出火致し、大風吹出し候頃は四ッ過より風出、火事始り候に依て久道村より出火、八子谷迄焼払、大家谷戸数四十五軒、内寺三ヶ寺焼失せし。山も多くやけ候とのこと也。

「宿谷家日記」

明治六年二月十五日

風吹 佛子と北小曾木へ年礼に行 久道にて大火有之 家数四十三軒焼亡ス

明治六年二月十六日

天気よし 久道へ出火見舞に行

(2) 明治十八年、八郎兵衛宅の火事の様子

「市川家日記」

明治十八年四月二十五日

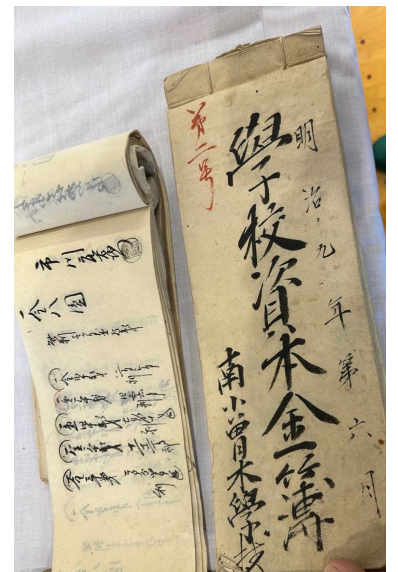
夜、当村小虫（古くは古武士を小虫とも書いた）八郎兵衛の木小屋を焼失す

「宿谷家日記」

明治十八年四月二十五日

…午後九時頃薪小屋ヨリ出火いたし焼失ス午後十時…迅速に戸長見舞いに来られる

また、八郎兵衛宅から発見された「明治九年 学校資本金簿」には、「市川家日記」の著者である市川庄右衛門が学校運営のために寄付した記録も残っています。



近世の小曾木周辺を知ることができる2つの日記。これらの著者同士は同時代に生き、お互い交流していたということを考えるだけでも、ワクワクしてきませんか。

「宿谷家日記」はまだすべてが解読されていませんが、引き続き読んでいきたいと思います。

(文責 儘田菜つ美)